



詩人・柴田トヨは、今、話題の人だ。90歳を過ぎて詩作に目覚め、98歳で詩集『くじけないで』を出版し、一躍、時の人となった。私の手元には、第二詩集『百歳』がある。その中で一番、私の心に残った詩が、『頁』という一編だ。

私の人生の頁を／めくってみると／みんな色あせて／いるけれど／それぞれの頁／懸命に生きてきたのよ

破きたくなった／頁もあつたわ／でもふりかえると／みんな なつかしい／あと一頁と少しで百頁／鮮やかな色が／待っているかしら

百にして何という瑞々しい感性か、と、驚くばかりだ。百歳にして自ら一人暮らしを選び取っているという強さも凄い。いずれにせよ百年という歲月のもたらすインパクトと、それを生き抜いてきた人間存在そのものが、この詩の大きな力となっている。言葉とは、それを語る人間のあり方そのものなのだ、ということに気づかされる。

私の専門は、臨床心理学だ。沢山の、悩みを抱え傷ついた心の声を聞

いてきた。言葉になる前の、あるいは言葉になり切らなくて漂い、くみ上げてもらいたがっていることばたちとの、取り組みだ。ことばたちと言ったものの実態は、時に声だったり、草だったり、持ち物や衣服だったり、体の病気や怪我だったり、行為や行動だったりする。人は、言葉以外のメッセージでコミュニケーションをとる。言葉になっているのは、伝えたいことのうち、ほんの一かけらだ。最も肝心なところをすつきりと言葉にすることは難しい。トヨさんの言葉は、素朴でありながら無駄がない。私心が動かされたわけはそこにある。

もう一編、『先生』という詩を紹介しよう。かかりつけのお医者さんに伝えたい言葉だ。

私を／おばあちゃんと呼ぶしないで／今日は何曜日？／「9+9は幾つ？」／そんなバカな質問は／しないでほしい

「柴田さん／西条八十の詩は好きですか？／小泉内閣を／どう思います？」／こんな質問なら／うれしいわ

心理臨床の現場でも、クライエントさんから言われそうだな、という耳の痛い言葉だ。実際の心理面接ではこんなことを思っている、言葉にしないか、ならないかして、いつの間にか離れていく人が多い。トヨさんのように、こんな言葉にしてくれと、こちらも分かりやすいので、うれしいな。